

于母澤寬
惡猿行狀

文藝春秋新社

悪猿行状

著者 ①子母澤寛こもざわ かん

発行者 上林吾郎かみはやし ごろう

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四

印刷 大日本印刷
製本 中島製本
製函 加藤製函

昭和四十年四月二十日発行

定価 四六〇円

目次

悪猿行状

悪猿行状

七

嫁えらび

六六

三ちゃん追悼記

六九

曲りかど人生

曲りかど人生

七五

「人」のはなし

お島さん

一四九

丸源のこと

一五三

三百代言

一五七

ほんとの知己

一六一

與三郎小僧

一六四

梅坊主

一六九

松平太郎という人

一七二

杉先生

一七八

次郎長拾遺

一八三

思ふこと抄

忠治の辞世

一八九

黒駒勝蔵

一九〇

泥舟と博徒

一九四

やくざの性根

一九七

夾竹桃

一九八

人物像について

二〇〇

人間の運不運

二〇三

慢心

二〇五

男谷検校のこと	二〇六
われ学ぶに年老いたり	二〇八
天舟翁のこと	二〇九
大平善藏先生のこと	二一一
三羽 さん は かりがね 雁	二二三
白と黒	二二七
在所弁	二二九
ルイべのこと	二三一
春の熊	二二二
そば屋談義	二二三
鴨の吸物	二二五
お墓と酒	二三〇
佛縁	二三二
花	二三三

日	記	二三五
若	い 人	二三八
桜の木のある家		二四一
落	書	二四二
オナガのブーチャン		二四四
美 ^の	声 ^じ 鳥 ^こ	二四六
不運なゴン		二四八
老	犬	二五〇
老犬との約束		二五三
追	慕	二五六

各章題字

著者の手稿より

惠
旌
行
狀

わたしは三ちゃんを一度も悪猿だなどと思った事はない。だがわたしの話をきいたわたしの友人達は一人残らず「それはどうも悪猿だね」という。そしてこんな題をつけろよという。まあそう云うならそれもいいでしょう、判断はみなさんにお任せいたします。わたしは可愛くて伶俐でこんな良い猿はこの世に二つとはいないと信じています。

悪猿行状

38・5 / 8

一

上野動物園の友人福田信正氏から電話で、

「可愛い台湾の牡猿がある、貰え」

という。こっちは動悸^{どき}つとしたが、いや待った、実は福知山にいる娘夫婦から、数日前にこれも電話で、赤ん坊程もある大きな日本猿の夫婦がいる、これが「工場の炊事のおばさんを咬んだので薬殺しよう」という話が出ている、そんな事を知らずに、檻箱の中で、とぼけているのを見ているとどうにも可哀そうで堪らない。おやしさんなら、前に稀代の猛猿を手なずけたという経験があるから、一つこれを引きとつて助けてやってくれませんか」というのである。

実は老妻との間に、伴や娘もいよいよ独立して、おれ達もたった二人になったから、またお猿でも飼おうかという話はちよいちよい出る。二人で動物園へわざわざ猿を見に行ったり、猿を売っている店の前に、一時間も二時間も邪魔をして、その猿達とすっかり仲よしになったりしているが、さて家へ買って来て飼うとなると、いつもの二の足を踏むのである。

何んといつてもこっちは年だ。とても昔のように元気でその辺をつれて歩いたり、さあ運動だ何んだと猿の相手も出来まいし、そうなると檻の掃除から何にかからお手伝さんの仕事も殖えて、気の毒になる。第一、牡にしる牝にしる、もしひよつとして大きな奴に檻を逃げられた時にこれを追っかけ廻すなんて事はとても出来ない。

「ほしいがまあ、考えさせてくれ」そういつて一旦電話を切りはしたものの内心甚だおだやかでない。ほしいのだ。それから幾日か経つてやつと氣持が静まりかけて来たところへ福田氏からのお話なのである。やつと眠りかけている子を起こすようなものだ。

「どうだ、貰うか」

「でもねえ」

「福田山のは二匹で人を咬んだりする荒っぽい奴らしいが、福田さんのは可愛いといっている。ほしいなあ」

老妻も凡そはわたしの氣持がわかったと見えて、

「飼いましょうか」

となった。

「そうだなあ」しかしその時はただはつきり決心はつかなかつた。まあ四分六の氣持だ。

その夜、知らない方から電話だという。出て見たら、

「あなた、家の猿を貰つて下さるそうですが、是非どうぞお願いいたします。あなたに飼っていた

だいたら、どんなにまあ幸福しあわせでございましょうか」

と女の方がしんみりした言葉つきでおっしゃるのである。

もう話がここ迄来ると、元々、猿が好きなんだから、否も応もございせんよ。

「では頂戴いたします」

わたしが、老妻とお手伝のおとしちゃんと三人、車で本所横川町の堀部喜代夫人を訪ねたのはそれから二日のちであつた。その間、大工さんに頼んだ箱が出来なかつたからである。車一ぱいになるような頑丈な大箱から、腰輪、鎖、毛布、うんちやおしつ、このためのタオルまで用意して伺つた。その猿は、堀部夫人の膝で遊んでいた。びっくりした。箱どころか、両掌の内にかくれて終う程小さい。台湾産九箇月。両親が日本で産んだ子だという。

わたしは前に二度程飼つたが何れも日本猿で、逞ましく大きかったので、この子猿ちゃんの小さいには全くびっくりした。

堀部夫人は、猿を下さるばかりでなく、風呂敷包み一ぱいの衣装を持たせてくれた。木綿、ネル、セル、どころか羽二重、お召。袷から綿入の袖無しちゃんちゃんこ。それから山のようなおむつ。おむつにはみんな尾っぽを出す小さな穴があいていた。

「三ちゃん、お前さん大層な物持だね」

わたしは自然に、これへ三ちゃんと名をつけた。前に飼つた二匹を何れもそう呼んだためだ。

堀部さんは、夫人の末の妹さんがお嫁さんに行つて、手不足になつて、どうにもお猿の面倒を見

切れなくなった。お猿の思うようにはしてやれないので、みんなでいろいろ相談した末に、これを上野の動物園に貰ってもらう気になったのだとおっしゃる。

二

余談ですが、堀部さんの場合は違うけれども、俗に「猿一と月」という言葉があるんですよ。これは、デパートなどで猿をちよいと見る、可愛いなと思う。買って来て育てて見ると、どうしてどうして容易なもんじゃあない。うんち、おしっこ、この世話から夏は蚊や虫の世話、冬は湯たんぽ。運動の事も考えてやらなくてはならない。

「一と月」って事もないが先ず一年がいいところで、大抵悲鳴を上げて「いくらでもいい誰か引きとってくれる人はいないか」という事にもなるんです。町の獣医さんの話だと、平均して先ず半年がいいところだと云いますね。

ところが、急に譲り受け手がないと、動物園なら、猿はいくらでも居るだけいいのだろう、これも一ついくらかで引取って貰おうかというので、おかしいのは恩着せがましく話を持込んで来る人がずいぶんあるそうだ。

ところが普通の家で飼うような猿は南洋ものの小さな奴か、台湾、カニクイなどありふれた物で、純粹の日本物さえ珍しいのです。

珍種ならともかく通常のも物ではいくら動物園だって困る。大きなところへどんどんぶち込ん

で置くという訳には行かないし、予算というものもある。大切に育てるとやっぱり人間一人前の費用はかかるんじゃないかと思えますね。

それですから、何処の動物園でも台湾やカニクイではお断りになるものなんです。猿を飼う以上、一生もんだという決心が必要なんです。人間と同じですから、ちよつと飼つて、ちよいと止めるという訳には行かないんです。それじゃあお猿が可哀そうだ。

むかし猿族の中に、今迄四つ肢で歩いていたが、ひょいとうしろ肢だけで立つて歩く事の出来た奴があつた。そうなると、歩くということについて前肢二本が必要でなくなつた、それだけまあ暇になつた。暇になつた分だけその前肢を外の事に使つて、それだけの文化を獲得するようになつて、だんだん発達し、遂に人間というものになつたという話がある。どっちにしろ、面つきから見たってわれわれに繋がっている。これらに余り淋しい思いをさせては、前肢を使う事を教えてくれた神様にだつて申し訳ありませんよ。

何れにもせよ、斯くして衣装風呂敷を持った猿はわが家へ来た。丁度大工さんが二人がかりでラワン材で急造したこの猿の住家は四尺四方。前を金網で張り、鉄棒をたて、夜は更にその上から中央に硝子窓のついた雨戸を下ろすようになってゐる。横に二つの覗き穴、一部は寝どころにするための二階作り、うしろに出入の口を設け、真新しいわらを一ぱい敷いて主人を迎えた。

一応ここを控屋敷としておくが、多くは外へ出てわたしと行動を共にさせるつもりである。腰へ

太い木綿の帯をしめさせ、これへ細紐を結びつけ、この猿の気持がわかるまで一端を私の左の手首に結びつけて胡坐あぐらの中へ抱き込んで、ここで三ちゃんとわたしとの新しい生活がはじまった。

先ず一番困ったのはおむつである。猿がうんち、おしっこを少しの届託もなく、時と処をかまわず、気づい気ままに放つ事は経験によってわたしは知っているが、おむつははじめてだ。生来長い尾っぽがあり、おむつに穴があいているだけに、この取替えが一人ではとても出来ない。左手で三ちゃんを押えておいて、右手だけで尾っぽの穴通し、畳たたみ込み、紐結びは不可能だった。

だから、この取替の度毎に老妻をよび、或はおとしちゃんを呼んでは、手伝って貰わなくてはならない。結局三人がかりになる事が多かった。

それよりも夜、わたしと一緒に寝る番になって、たれ流しならたれ流しで、こつちにも覚悟が出来るんだが、何んとなく、ふんわりと臭いおむつには閉口した。

三ちゃんは、堀部さんでどなたかと一緒に寝る事は馴れていたと見えて、それにまだほんの子供だし、甘えるように、わたしの胸へしがみついて割合平気で云う事をきいて、すぐすやすやと眠ったようであった。

が、由来、猿は犬よりももっと眠れるが如く、然さにあらざるが如き状態のものである。ねむっていると思うと直ちに這い出して、先ず枕元の電気スタンドを引っくり返す事にはじまって、わたしの頭へ乗り、顔へ乗り、更に何にをやり出すか知れたものではない。とてもとてもあつけられかんと眠ってなんぞ居れない。そして出しぬけに、わたしの顎あごへ咬みついたのである。

びっくりした。が、子供だ。痕がいくらかついたか、つかないかと思う程度で先ず大した事はない。

「こら、そんなことをしちゃあいかん」

そういつて、蒲団の中へ引つ張り込んだが、ほんの十分か二十分、時には三十分もじつとしてねたふりをしているが、すぐに這い出して、わたしの顔に乗って終うのである。尤もわたしの手首と結んだ紐が、二尺足らずでそう遠くへは行かれないためもある。

御承知でしょう、あのお猿の石よりも固いお尻、それを顔へのつけられたんではとても堪ったもんじゃあないのです。実はあれは非常に固いけれども、皮のような薄いものを一枚めくるとすぐ血が流れ出る妙なものだ。それだけに、猿の細かい神経が通っているらしく一番坐りのいいところへ、あの固いところを置く。こっちの両方の眼とか額とかへ置くから甚だ困る。

三

しかし、こんな事を二た晩もやっているとこっちが寝不足で、半病人のようになって終う。元より一行も書けやしない、うとうととしていた間に寢床の中で、あの立派なおむつが脱れてわたしの方が三ちゃんのうんこ、いつこにまみれて終う。

朝起きると、老妻やお手伝さん達に、わたしは素っ裸にされて、湯殿でそこら中を洗いまくられる。そんな事はまあいいんだが、この年で三日眠らないともう坐ってもいられないんですよ。

とうとう三ちゃんは夜十時から、わたしの部屋の近く縁側の外に置いてあるかれの控邸に行つて貰う事になった。

四月だった。それでも夜中にひよつとして寒くでもなつたら大変だといふので、蓄熱電気あんかなるものを買いに出かけたが、季節はずれでさあ何処へ行つても無い。半日がかりでやつと探して買つて帰り、これへ充電して、三ちゃん控邸へお引取りと一緒に、ぼろ毛布へ包み嚴重に紐をからげて一隅へ入れて置いた。

「明日また、な」

わたしは三ちゃんの小さなお握り程の頭あたまを撫でて別れた。真つ暗な箱の中へ、たった一人、三ちゃんを残す事が堪らなく淋しかったが、いえつ仕方がねえ、あきらめて、やがて自分の寢床へ入つた。

真夜中である。わたしは耳をくすぐるような猿の声で、眼をさました。ホウ、ホウ、ホウと聞こえる。堪らなく可愛い、堪らなく淋しい声である。いつもよくそう思うんですよ、谿の辺りには灯一つなく、月もまたない山の旅籠はたごにでも泊つていて、もしその谿底から、こうした猿の声でも聞こえて来たら、わたしは一体どうしようかね。

その声である。わたしはすぐ起きて行つた。急いで雨戸を開け、

「三ちゃん、どうしたどうした」

といったら、キャツ、キャツと叫んで、それっきり静かになった。心配だから、懷中電灯を持出